

## 英語科・外国語活動を中心とした提言（若手 保彦 先生）

### はじめに

今年度は、教科指導員として小学校2校、中学校1校の計3校を訪問、視察する機会をいただきました。これまでと同様、私の話は「提言」と言えるようなものではないが、せっかくの機会なので、訪問を通じて感じたこと、また今後の取組の方向性について、英語教育の立場から述べさせていただく。

### 学校訪問全体に関する感想

こちらは毎年同じであるが、訪問したどの学校においても、廊下で会う子どもが元気なあいさつをしてくれる。先生方の日々の粘り強い指導の成果であると感じる。

最初の時間の学校経営説明では、各学校でそれぞれ特色のある目標が定められ、目標の実現に向け組織として一体感を持って取り組む姿勢が印象に残った。一般授業参観では、子どもの関心を少しでも高めようと、それぞれの先生方が発問や活動を工夫していた。教室に貼られた様々な掲示物からも、学習へ意識を向けようとする努力の跡が感じられた。

### 特定授業のうち、特に英語および外国語活動の授業に関する感想

特定授業では、どの授業においても、子ども同士のインタラクションが活発で、かつ円滑に行われており、普段からコミュニケーション活動が積極的に取り入れられていることが窺えた。背景には、子どもたちが失敗を恐れずに取り組めるような教師の言葉がけや指示の的確さ、メインの言語活動に取り組む意義を感じさせる事前の説明やプレゼンの工夫等があると考えられる。

今年訪問させていただいた中学校1年生の英語の授業では、上記に加え、「ALTにクラスメートのことを伝えよう」というALTの存在やニーズを生かしたタスクの設定、単元の主要な文法事項である三人称単数現在形（以下「三単現」）を使用することが求められるレポーティング活動の設定等の工夫が見られた。現行中学校学習指導要領の外国語科の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2のエには「文法事項の指導に当たっては、次の事項に留意すること。」とあり、(イ)では「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上での必要性や有用性を実感させた上でその知識を活用させたり、繰り返し使用することで当該文法事項の規則性や構造などについて気付きを促したりするなど、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。」という文言があるが、参観した授業では文法指導と言語活動が効果的に関連付けられていた。

また、ALTが2人いる状況をうまく活用していた点も印象に残った。例えば、モデルの提示の際にALT同士に会話をしてもらうことで、日本人教師は生徒が会話をどのくらい理解しているかの観察に集中することができる。また、子ども同士で活動する際に机間巡視をしながら助言できるALTが複数いることから、質問の自由度を高める指示を出していた。

一方、今後の課題としては、会話の自然さを意識することや文法指導の際の補足説明が挙げられる。前者については、生徒同士のやりとりに“Where do you live?” “I live in Akita.” が含まれていたが、学区が同じ生徒の場合、この質問は相手のことを知りたいという気持ちから発せられる“genuine question”というよりは、文法事項の理解の確認を目的としたいわゆる“display question”の色彩が強い。同じ学区内の子ども同士でやりとりをするならば、“Where in Akita do you live?” “I live in Yabase.” “Oh, Yabase. Do you often go to パブリ?” のようなやりとりを目指すようにさせたい。会話の自然さという点では、質問同士のつながりを意識することも重要である。この活動では、“What do you do in your free time?” “I watch TV.” “What color do you like?” “I like blue.” とい

うやりとりがあったが、“What do you do in your free time?”と“What color do you like?”の2つの質問の間につながりを感じることができなかった。会話の自然さを意識するのであれば、前者の質問の後に“ Oh, you watch TV. What TV shows do you like?”のような反応と質問ができるようにさせた。答えに応じた質問は即興で考える必要があるが、これは前述の学習指導要領の「話すこと（やり取り）」の目標「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。」の達成にもつながる点で効果的と考えられる。また、答えに応じて質問を考えるため、思考・判断・表現力の育成にもつながる。

後者の文法指導の際の補足説明に関しては、このクラスに偶然「アイさん」と「ユウさん」がいたのだが、三単現のsがあることで、Ai lives in ～. と I live in ～. あるいはYu watches TV after school. と You watch TV after school. の区別ができることを説明すれば、三単現の役割を意識させることができたと思う。

小学校の特定授業に関しては、今回は二つの授業で偶然4年生の同じ単元を扱っていたが、「身近な人のために文房具をそろえよう」「〇〇さんのための文房具セットをつくろう」のように他者のために取り組む活動が設定されていることや、単元の中で成長を感じられるような振り返りシートのレイアウトの工夫がなされていることが印象に残った。こうした活動の設定および振り返りの工夫は、自己肯定感の育成にもつながると考えられる。また、二つの授業では、自信を持って言うことができなかった語句の発音練習や、子どもの理解を促したり、反応を引き出すためのジェスチャーの工夫等が共通して見られた。授業者の先生方が、子どもの様子をよく観察していることが窺える場面であった。この他にも、上手く言えなかった子どもに“Nice try.”と言って積極的な姿勢を褒めている場面があったが、特に外国語活動の段階では児童の挑戦する姿勢を育てることが重要であり、高く評価できる。

今後の課題としては、早く活動が終わった子どもにどのような課題を与えるのか、検討していくことであろう。個人的には、コミュニケーションの中で児童が「知りたい」と感じた表現をメモさせたり、まわりの子どもや教師に尋ねるといった、リフレクションの要素のある活動が大切であると考えられる。メモや質問の中には未習の、難しい語句も含まれるかもしれないが、活動の中で子どもが「知りたい」「何だろう？」と思って尋ねてきた場合は、「今後習うから」ということで後回しにするより、その場で与えてしまった方がよいと思う。子どもがいわゆる「頭」ではなく「気持ち」の部分で「知りたい」というニーズを感じることが、言語習得の面ではまたとない機会になるからである。子どもがコミュニケーション活動を通じて、このようなニーズを感じる機会をたくさん作っていくことが、言語学習では非常に重要になる。